

## 第326回昭和の森自然観察会

### 冬の植物の過ごし方

梅宮玲子（市原市）

日 時：2019年2月10日（日）13時から15時 天気：晴れ

参加者：14名（大人10名、子ども4名）他1名 指導員7名

担当指導員：佐野由輝・梅宮玲子

雪模様の昨日とはうって変わり快晴。広場のあちこちに個性的な雪だるまがいます。前日の雪の影響で人数は少ないので心配していましたが、問題はありませんでした。

冒険広場からスタート。新芽が開く姿を表現した日本語「芽ぐむ・芽吹く・芽立つ」の話を聞いて、目の前の冬芽がどの状態なのか全員、観察開始。

コナラの冬芽はルーペでよく見ると、何枚も重ね着しています。ハクウンボクの冬芽は落ち葉の根元（葉柄）にすっぽりはまり、大切に保護されていたことがわかりました。冬芽の位置で頂芽と側芽、将来の姿で花芽と葉芽、枝の伸長の仕方で春先スタートダッシュタイプ（頂芽）と秋までのんびりタイプ（仮頂芽）等々、樹種ごとの生き抜くための様々な工夫に感心しました。

すぐ足元には半地中植物のタンポポ。ロゼットの形で省エネ対策を取り、頑張って咲いています。子どもたちがいろいろな種類のロゼットを探しながら数え始めました。

ちょっと歩いて、イヌシデの冬芽で子ども達、大人の順に目をつぶって、ほっぺにつんつん。次にアカシデ。頬に触れた感触で、アカシデは尖がっていてちょっぴり痛く、それに比べるとイヌシデは柔らかく、くすぐったい。次に目を開けてよく観察すると他にもいろいろと違いを発見。

市町村の森では、常緑樹の葉っぱの寿命を芽鱗痕から数えてみます。3年もついている葉もありました。また、ハリエンジュの芽は棘に守られて上手に隠れんぼ。若い枝ほど、棘が元気。カエデには同じ大きさの頂芽が2つ並んでいて、子どもたちも「どっちが頂芽でどっちが予備芽？」と不思議顔。展望台の前をよこぎると梅林の隣に到着。トチノキの大きな冬芽は触ってみると粘々。乾燥から芽を守るために、他の昆虫等に食べられないようにするため？ハナミズキのお饅頭のような花芽も観ることが出来ました。

ところどころ雪の残る広場に紅、白、桃色の梅がきれいに青空に映えて、良い香りでした。

今回は子どもたちの観察眼の芽もすくすくと芽吹いていることを感じました。



きれいに咲いていた紅梅をみんなで観察



芽鱗痕から常緑樹の葉の年を計算中